



絆

泉山長老
後朝

京都第一赤だより

き す た

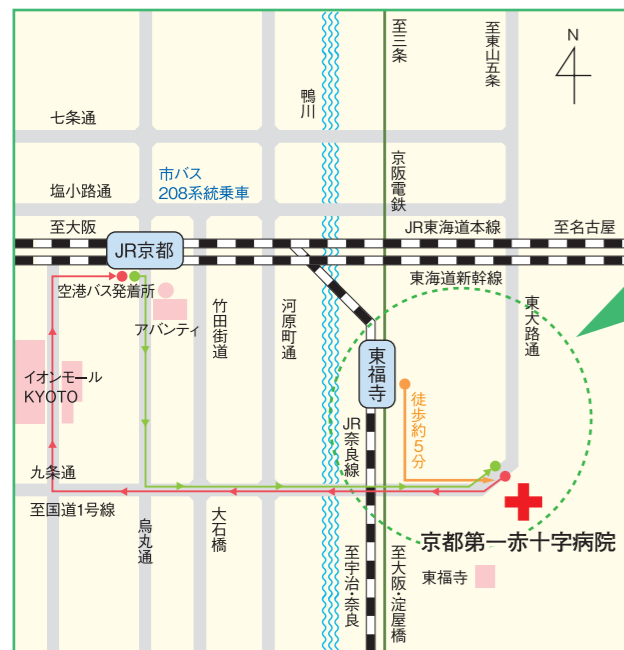
人道と奉仕の赤十字精神に基づき、
患者さまにとって安心できる
適切な医療を行ないます。

新春号

2022年1月発行
vol. 82

Access to Japanese Red Cross Kyoto Daiichi Hospital

当院へのアクセス



- 電車をご利用の場合**
JR奈良線、京阪電鉄「東福寺」駅下車、徒歩5分
- バスをご利用の場合**
市バス202, 207, 208系統「東福寺」バス停下車
- 車をご利用の場合**
【奈良、大阪方面から】... 京都南IC出口、国道1号線を北へ約2.5キロ京阪国道口を東(右折)へ、九条通りを約2.5キロ
【山科、大津方面から】... 国道1号線を西進、東山五条交差点を南(左折)へ、東大路通りを約2キロ
【京都駅付近から】... 竹田街道を南へ約500メートル、大石橋交差点を東(左折)へ九条通りを約500メートル

無料シャトルタクシー運行のご案内(JR京都駅八条口⇨病院(地下鉄九条駅経由))

	八条口発 病院行き	病院発 八条口行き
始発便	7:45 次発 8:10.以降30分間隔で運行	9:00 以降30分間隔で運行
最終便	16:10	16:00

※12:40八条口発の便は運行しておりません。 ※12:30病院発の便は運行しておりません。
 ※交通状況により時刻に遅れが生じる場合があります。
 ※運行は平日のみとなります。土・日・祝日等病院の休診日は運行いたしません。
 ※定員9名のため満員の場合は次の便をご利用ください。

京都第一赤十字病院

京都市東山区本町15-749 TEL.075-561-1121

地域医療連携室 【直通】TEL.075-533-1280
FAX.075-533-1282

Contents

- 令和3年度 病診連携懇話会開催報告 2
- 看護フォーラム開催報告 3
- 小児科・新生児科のご紹介 4, 5
- 小児外科のご紹介 6
- JCEPの受審報告 7
- インフォメーション 8

明けましておめでとうございます。昨年は多くの患者さんを紹介していただき、また、逆紹介や転院など、多大なご支援・ご協力をいただき深く感謝申し上げます。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

威勢のよい寅年ですが、年始早々からコロナ第6波がどのように経過するかが大きな鍵となります。感染者がでてでもワクチンや治療薬の効果で重症化率が低く抑えられ、4月頃からはインフルエンザ並みの取り扱いとなるシナリオが楽観的なのですが...

さて、令和4年の当院のビジョンは「地域に信頼される最高の基幹病院を目指す」であり、サブビジョン

は、臨床・学術・教育・地域連携の四方よし、愛と誠と夢のある病院づくり、WITH&AFTERコロナへの対応、であります。具体的には、基幹である救急・高度急性期医療とともに、オープンした緩和病棟を含めたがん診療の更なる充実を図っていきたいと思います。

そして、喫緊の課題として2024年へ向けた医師の働き方改革があります。働き方改革は単なる時間外労働時間の短縮だけでなく、業務の見直し・効率化、適正な人員配置、IT化の促進など、病院改革そのものであり、全力で取り組んでいく所存です。

皆様にとりまして、本年がより良い年となりますよう心より願っております。

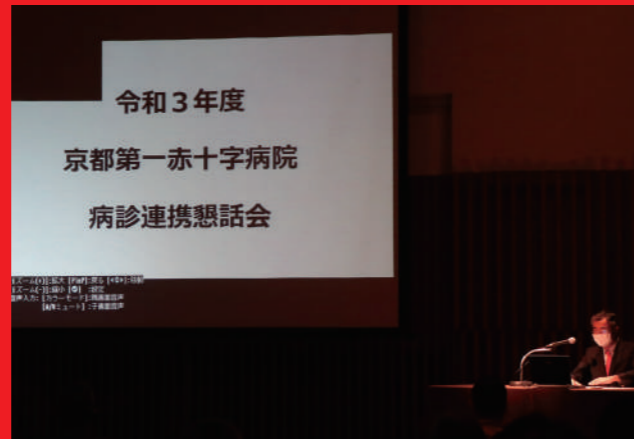
院長 池田 栄人

令和3年度

病診連携懇話会 開催報告

地域医療連携課
地域医療連携係長

福井 宏子



令和3年10月7日(木)にハイアットリージェンシー京都にて病診連携懇話会が開催いたしました。コロナ情勢を鑑みて今回も引き続きZoomウェビナーを使用したオンラインとのハイブリッドでの開催となりました。

結果、会場参加者34名WEB参加者55名の計89名にご参加いただき、盛況のうちに無事終えることが出来ました。今回は「当院における新しい診療」をテーマに講演させていただきました。「タイムリーな内容で良かった、最終の治療や貴院の取り組みが良く分かり充実していました。」など概ね良好な評価を頂け、今後の地域医療連携に実りのあるものになったと感じています。来年度以降も多くの方にご参加いただける良き会となるよう、懇話会を企画してまいります。

今後とも何とぞよろしくお願い申し上げます。

【開催概要】

日時:令和3年10月7日(木)18:00～
会場:ハイアットリージェンシー京都
形式:ハイブリッド開催(会場+WEB配信)

【プログラム「当院における新しい診療」】

- ◎緩和ケア病棟を開設します
— 切れ目のないがん診療と
双方向性の緩和ケア連携をめざして —
[緩和ケア内科部長]上田和茂
- ◎COVID-19肺炎の画像診断
— その多彩な合併症を含めて —
[放射線科部長]佐野優子
- ◎消化器診療のトピックス 肝胆膵領域
[第一消化器内科部長]佐藤秀樹
- 消化器診療のトピックス 消化管領域
[第二消化器内科部長]奥山祐右
- ◎「今年度の体制について」



Japanese Red Cross Kyoto Daiichi Hospital

令和3年度 看護フォーラムを終えて

看護副部長 | 中津 みつる



「がん患者のより良い地域連携に向けて～がんサバイバーケアを考える～」をテーマに令和3年度看護フォーラムを11月20日に開催しました。地域の看護職や医療・介護を担う他職種との連携を深めるために回を重ね、今回で7回目となります。昨年はコロナの影響で中止としましたが、今年度は初めてのWebでの開催で院外18名、院内64名が参加しました。

「がんサバイバー」とは全ての「がん体験者」と定義されています。この概念は医療の進歩によりがん患者の生存率が延伸し、治療後も長く付き合っていく病気としてがんを捉えるようになったことが背景にあります。がん患者が社会復帰し日常生活を営んでいく上で、再発の不安や治療の副作用の管理の他に、就学、就労、結婚、妊孕など様々な精神的・身体的・社会的問題を抱えています。そのため、がんと診断された時から人生の段階や社会背景など対象の特性に応じた長期的・継続的な包括支援であるサバイバーケアが必要となります。

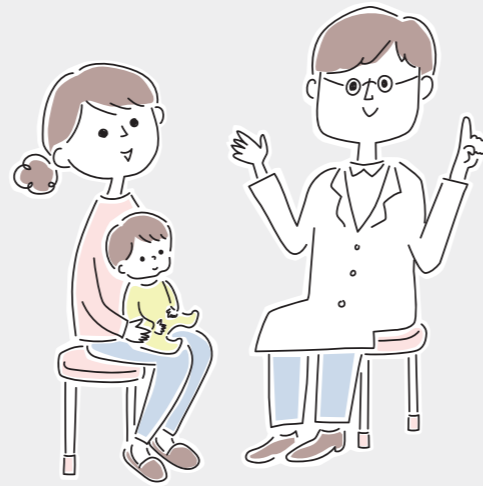
フォーラムの内容はがん専門看護師の講義でがんサバイバーの理解を深めた後、サバイバーケアの実践報告として乳がん看護認定看護師が外来での看護の展開を、またがん相談室のMSWが活動の報告をしました。そして地域の訪問看護ステーションの訪問看護師から当院と連携して看ている乳がん患者の報告をして頂きました。その後、パネルディスカッションで講演者ががん患者の看看連携についての問題や今後の課題について情報共有と意見交換を行いました。そこで患者・家族の価値観や思いを尊重したケアを行うためには、病院と地域がシームレスに繋がることや患者を地域で暮らす生活者として捉える視点が重要である事を再認識できました。Webでしたが地域の方々と有意義なディスカッションができ、コロナ禍で少し空いてしまった距離をまた縮めることができました。次年度は是非対面で懇親を深めることができるよう切に祈っております。

日本では2人に1人ががんになると言われ、今後もがん患者の増加が予測されています。地域がん診療連携拠点病院として急性期治療から緩和ケアまで、質の高い包括的がん診療の提供ができるよう地域の皆様と連携しながら継続して取り組んで参ります。



小児科のご紹介

平素より病診連携を通じて大変お世話になっております。厚く御礼申し上げます。小児科では、小児一般診療に加えて、神経、内分泌・代謝、先天代謝異常、循環器、腎臓、アレルギー、心身症の各分野で専門の常勤医師による診療を行っており、また周産期NICU退院後の児の継続フォローや特に医療的ケア児の受け入れ、24時間365日の救急患者の受け入れなどにも力を注いでおります。今後も地域の小児医療の充実と発展のために尽力していく所存ですので、何卒ひきつづきご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



神経 短田・近藤

小児神経救急に積極的に対応しており、京都府下より様々な紹介症例を受け入れています。ポータブル脳波やASL、MRSなどを含む頭部MRI検査などの検査体制、集中治療体制も充実しています。また、発達の遅れや様々な神経疾患を有する小児の診療を幅広く行っており、在宅人工呼吸器管理など重症度の高い多数の医療ケア児のフォローも行っています。

内分泌・代謝 濱田・木崎

成長ホルモンや甲状腺ホルモンなど各種ホルモン異常による小児内分泌疾患に対応しています。また1型糖尿病の急性期や慢性期の診療も行っています。

先天代謝異常 近藤

ミトコンドリア病、アミノ酸代謝異常症、脂肪酸代謝異常症、ライソゾーム病など様々な先天代謝異常症の診断、治療や緊急時の救急対応を行っています。

アレルギー 濱田・瀧上

小児気管支喘息や食物アレルギー、アレルギー性鼻炎等の小児アレルギー疾患の診断、治療を行っています。また喘息発作やアナフィラキシーなどの救急にも対応しています。

■ 主な入院疾患（2020年度）

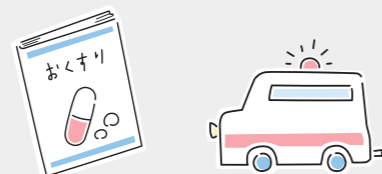
疾患名	患者数
痙攣・てんかん	72
肺炎・気管支炎	52
上気道炎	43
食物アレルギー	42
気管支喘息	38
川崎病	26
低酸素性脳症	23
ネフローゼ症候群	21
突発性発疹・手足口病	19
尿路感染症	18
成長ホルモン分泌不全性低身長症	17

■ 主な検査など（2020年度）

検査名	件数
食物アレルギー経口負荷試験	31
ポータブル脳波検査	25
成長ホルモン分泌刺激試験	20
トレッドミル運動負荷心電図	16
経皮的腎生検	15

■ 小児科スタッフ

	メンバー
部長	西田真佐志
副部長	小澤誠一郎
副部長	濱田 裕之
副部長	短田 浩一
医長	奥村 保子
医長	近藤 秀仁
医長	瀧上絵里香
医員（産業医兼務）	小森 友貴
医員（産業医兼務）	甲山 望
専攻医	木村 洋介



循環器 小澤・奥村

新生児、乳児心疾患の精査、学校心臓病3次検診、川崎病既往後の管理、先天性心疾患の管理（手術適応判定、術前・術後の管理）、不整脈など循環器疾患全般を扱っています。また、より高度な治療を必要とする場合には、京都府立医科大学附属病院小児医療センター、国立循環器病研究センター、大阪市立総合医療センター、大阪府立母子保健総合医療センター、兵庫県立こども病院などと連携し、必要ならば適宜紹介しています。

腎臓 西田・奥村

急性・慢性糸球体腎炎、ネフローゼ症候群、先天性の腎疾患や尿路形成異常、尿路感染症、尿細管機能異常、電解質異常、急性・慢性腎不全などの疾患を対象に、腎生検を含む検査や治療・管理を行っています。また小児泌尿器疾患や腎移植が必要な症例では、京都府立医科大学小児泌尿器科、移植外科と連携し診療を行っています。

心身症 小森

近年、心の問題を抱えるこども達が増えており、主に発達障害を除く心身症のお子様を担当しています。小児科医の立場として患者一人一人と向き合い、お子様や保護者らと共に悩み、こども達が健やかな心の健康が取り戻せるように関わっていただければと思います。

新生児科紹介 (NICU/GCUが新しくなります)

新生児科副部長 | 木下 大介
新生児科部長 | 西村 陽



図1: 患者ケア場面(コロナ禍前の写真のためマスク非着用です)

当院NICU/GCUは京都府の総合周産期母子医療センターであり、1997年にNICU6床/GCU20床で開設され、2007年にはNICU9床/GCU18床の拡張工事を行いました。NICU/GCUでは、生命の危機にある赤ちゃんとそのご家族のために新生児科・小児外科をはじめとする多診療科・看護師・薬剤師に加え、理学療法士・放射線技師・MSW等のコメディカルが一丸となりチーム医療を実践しています(図1)。

当院NICUの特徴としては、切迫早産母体や妊娠高血圧症母体からの早産児の診療実績や、多岐にわたる症状を主訴とした病的新生児の新生児搬送件数(迎え搬送、他院への三角搬送)が京都府内で最も多いという事が挙げられます(図2)。

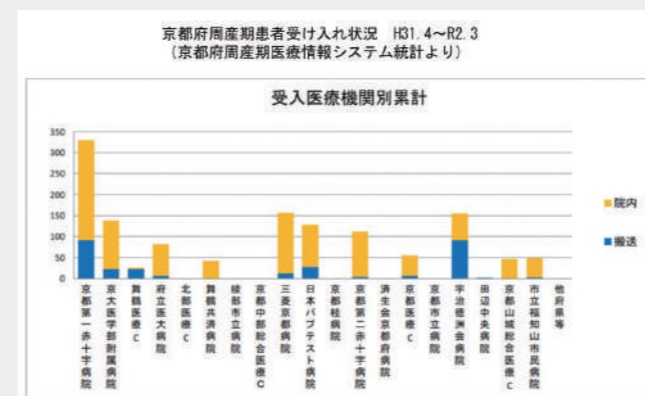


図2: 新生児患者受け入れ実績

かつての新生児医療といえば長時間労働の代名詞であり、新生児科勤務は敬遠されてきましたが、近年は診療の質・医療安全・持続可能性を重要視し、働き方改革をいち早く実践しています。完全主治医制は撤廃しチーム制、フレックスタイム制、当番以外の医師の週末勤務禁止、育児支援・様々な生活様式に合わせた勤務形態の推奨、情報共有カンファレンスの充実などを推し進めました。現在の新生児科常勤医師は13名であり、そのうち7名が女性医師です。

「NICUを辞めたい・・・」という医師は激減しており、医師のチームワーク・経験値が向上しています(図3)。



図3: 新生児科若手医師の診療場面(コロナ禍前の写真のためマスク非着用です)

新生児科の今後の課題として、後進の育成と周産期施設の集約化への対応が挙げられます。少子化が進んでいますが、出生数に占める早産・低出生体重児の割合は増加傾向にあります。しかしながら、新専門医研修制度では今後育成すべき小児科医の数を増やす必要がないと判断されており、周産期医療の持続性の大きな懸念材料となっています。現在の新生児科チームの雰囲気を感じていただければ新生児科医を目指したくなる学生・研修医も多いと確信しており、新生児科研修等を通して若手医師に新生児医療の魅力を伝える事が出来ればと考えております。また、当院のNICU/GCUは手狭で老朽化が問題となっていました(図4)、赤ちゃん和家人スペースの確保・より良い感染/安全管理を目的とし、令和4年度にNICU/GCUの全面改築を行うことになりました(NICUは9→12床、GCUは18→12床と病床再編、改築中の受け入れ制限なし)。今回の改築・病床再編によって、今後の周産期医療の集約化に対応可能となることに加え、より安全で魅力的な環境にて赤ちゃんやご家族を細やかに見守れることで、スタッフの更なる働き甲斐にもつながればと考えております。

引き続き新生児科・NICU/GCUをよろしくお願いいたします。



図4: 現在のNICU風景

小児外科のご紹介

先生方におかれましては平素より当科の医療連携にご協力いただきありがとうございます。小児外科は現在、常勤スタッフ3名（指導医1名、専門医1名）にて診療にあたっています。主に新生児から15歳までの外科疾患を対象としていますが、15歳以上の症例であっても小児外科特有の疾患に対しては年齢制限を設けることなく対応しています。

当院の特色として総合周産期母子医療センター及びNICUを有しており、新生児外科症例に対して迅速に対応が可能となっています。また、近年増加している医療的ケア児に対する診療も積極的に行っており、経管栄養や胃瘻造設・管理などについても小児科と協力し治療を行っています。さらに、当院は小児救急診療を24時間

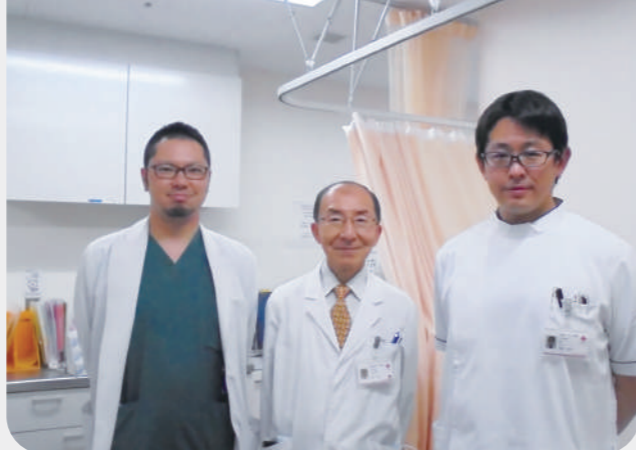


写真 左から西子、出口、坂井

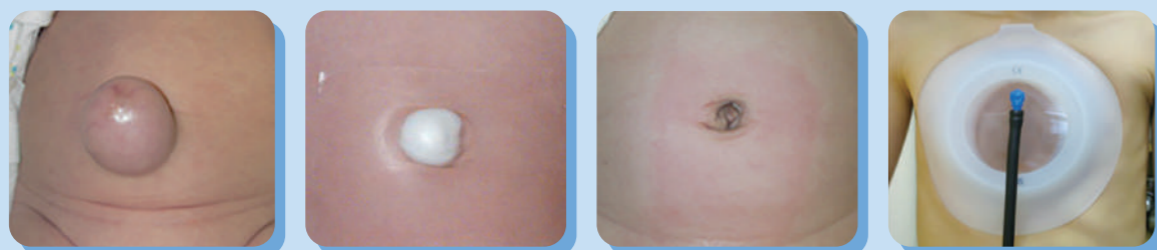
体制で行っており、小児科・救急科を含め様々な診療科と連携して外科疾患の救急対応を行っています。

手術症例として最も多い鼠径ヘルニア・陰嚢水腫には腹腔鏡手術（LPEC法）を導入し低侵襲手術が行えるように努めています。また、鼠径ヘルニアや臍ヘルニア、停留精巣などの症例に対してはクリニカルパスの導入により1泊2日で入院加療を行い、患者様及び御家族への負担を少しでも減らせるように努めています。

また、小児外科は決して手術症例のみの対応だけではなく、下記の如く保存的加療や小児消化器疾患における検査などにも対応しています。病診連携の先生方におかれましては少しでもお悩みの症例があればどうぞご紹介ください。

	2018年	2019年	2020年
入院症例	176	173	148
手術症例	166	142	122
新生児症例	12	9	10
新生児手術症例	9	10	7

小児外科 外来担当表	月	火	水	木	金
一診	坂井		出口		
午後診 (予約)	坂井		出口		樋口 (第1,3,5週)

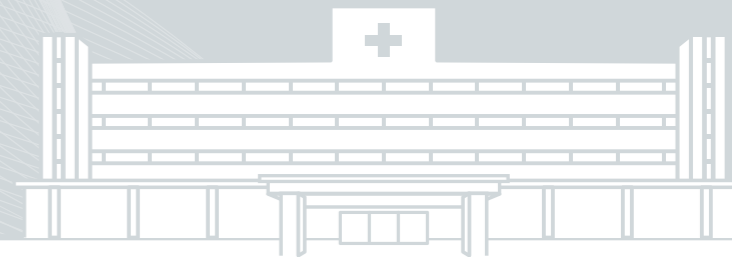


- 臍ヘルニア：綿球圧迫療法
- 漏斗胸：バキュームベル療法
- 難治性便秘症の管理
- 胃食道逆流症の評価
(上部消化管造影検査、24時間食道インピーダンスpHモニタリング)

JCEPの受審報告

教育研修推進室長
副院長

福田 互



当院は、医師の臨床研修指定病院として今後求められる第三者評価、「卒後臨床研修評価機構（JCEP）」の審査を2021年12月1日に受けました。協力研修施設・医師会の先生方にもカリキュラムの確認やアンケートへのご協力などいただき、厚く御礼申し上げます。たった1日の審査でしたが、書類審査のみならず、研修医・指導医の面接、症例提示、部署訪問など、大項目8、中項目27、小項目88の計123項目に及ぶ審査事項があり、約半年かけて準備を進めました。「初期臨床研修プログラム」を大きく改訂し、「臨床研修の手引き」を新規作成して研修システムの整理と明文化を行い、指導医や指導者の役割や位置づけを明確にしました。また、研修医の評価方法もWEBシステムを取り入れて整備しました。まだまだ十分ではありませんが、今回の受審を機会に、当院の初期研修システムを全国標準の形式に合わせ、一歩改善することができたと思っています。一方で、「インシデント・レポート記載」など医療安全教育への取り組み、「一般外来研修」や「研修医のサポート体制」の一層の充実、「研修修了者への配慮」や「臨床研修指導医のより積極的な育成」などの課題も明らかになりました。

今回の審査結果により、その時期が変わりますが、当院は今後も定期的にJCEPの審査を受けて

いく必要があります。高度急性期病院として生き残るためには、優れた医師を育成すること、常に初期研修システムをブラッシュアップしていくことが求められます。全職員が臨床研修への高い意識を持ち、臨床研修指定病院としての役割を果たせるよう、病院一丸となって邁進する所存でございますので、今後ともご協力いただけますようお願い致します。

